

# ミュージアム 通信

艶やかに、鮮やかに、  
着物の内からのぞく  
紅の色

[企画展のご案内]  
江戸の赤



「江戸名所百人美女 新宿」(部分)・豊国・国立国会図書館 所蔵

## 艶やかに、鮮やかに、着物の内からのぞく紅の色

幻の染め「紅板締め」  
べいたじ

浮世絵の女性がまとう着物の内から大胆にのぞく、艶やかで燃えるような紅色の長襦袢…。

かつて、間着や長襦袢などを染めた技法のひとつに「紅板締め」というものがあつた。

「紅板締め」とは、花や鳥などの模様を彫った版木(型板という)に薄絹を挟み、そこへ赤い染料液をかけ、緋色地に白い模様を染め出す技法を指す。紅染めの一種である。紅板締めは、板締め専門の染屋ほか、紅屋が兼業で担うこともあつたようで、事実、伊勢半本店三代目・半右衛門の折に手掛けたという記述が当社資料にも残っている。

板締めの起源については明らかでないが、すでに奈良時代には行われていたようで、正倉院にその裂が残っている。



型板と紅板締め(共に江戸時代末期～明治初期)

しかし、紅板締めが隆盛を極めるのは江戸時代中期以降である。板締めには、木綿を藍で染めた「藍板締め」と、生絹を主に紅花で染めた「紅板締め」とがあり、紅板締めは長く京都で独占的に行われてきた。着物の裏地や胴装着物、長襦袢などに使われた紅板締めは、母から娘へと受け継がれ、何度も繕い、仕立て直し、端切れになっても他の布と継ぎ合わせ、産着や袋などの小物に転用するなどして、最後まで大切に使用

されていたという。

だが、そんな紅板締めも、型染め(プリント染め)の普及によって販路を急速に失い、昭和初期には、その技術が完全に途絶えてしまうという事態に陥った。それがゆえんで、今日では幻の染色技法と呼ばれている。

### 紅板締めの染色工程

「紅板締め」の型板は、寸法縦23cm、横45cm、厚さ1.5cm程度で、通常一組十三枚になっている。一番上と一番下にあたる板は片面のみ彫り、残りの十一枚は両面に、板を返したとき模様が上下対象になるよう彫り抜く。板には型紙をあて、墨で模様を写してから彫る。

この時、少しの狂いもなく正確に同じ模様を彫る技術が必要となるのだが、模られた流麗な模様は、時代をさかのぼるほど緻密になり、板を彫る職人

の技術の高さがうかがえる。また、彫り上がった板の表に漆を塗ること、白く染め抜く部分(凸版)に染液が浸透するのを防ぐだ。



鶴は吉祥模様としてもてはやされた人気柄

染めは、およそ次のような手順で行う。

一正(長さ約24cm)の薄絹を、糊を塗った型板(片面彫りの板)に載せ、型板と等幅に八回折畳む。八折りした絹の上に、両面に糊を塗った別の型板(両面彫りの板)を載せ、絹を挟み込む。そのまま、絹を板の長辺で折り返して、

再び八折りする。この作業を繰り返して、十三枚の型板に順次絹を挟み込んでいく。

そうして重ねた一組の板と絹を「やぐら」と呼ばれる木枠で締め、これを回転させながら染料液をかけていく。染料液をかけては回し、かけては回しという作業を繰り返すうちに、凸版と凹版との生地は白く残り、凹版部分(板のすき間)には染料液が流れて赤く染まる。仕上げは、余分な染料と糊を水で洗い流し、木枠と型板を外して十分に乾燥させる。

染め上がった紅板締めは、型板の幅に合わせて、緋色地に牡丹や菊、鶴などの吉祥模様が反転しながら連続するものが特徴である。また、絹を折り返した部分、つまり板の厚みの分だけ無地



文献から復元した「やぐら」と呼ばれる木枠

場となるため、等間隔で模様と模様との間に線状の区切れ目が生じる。これも、紅板締めならではの特徵である。したがって、同じような赤と白の染め柄であっても、型染めと板締めとは、はっきりと区別できるのだ。

### 思考錯誤の末に復元した紅染め

さて、長く京都で独占的に行われてきた紅板締め業であったが、幕末の頃より、地方の染屋などでも行われるようになって、そのうちのひとつに、

現群馬県高崎市の吉村紅染工場があった(現吉村家)。

当家は、弘化二年(一八四五)の創業より昭和七年(一九三二)に渡って、高崎を代表する染屋であった。当家には、京都の染織業者から譲り受けたと思われる七十四枚(七種類)の型板や、関連の文献が残っている。これらの中には、板の割れた部分に木を補って接いだもの、麻糸や金具などで繋げたものなど、幾度も修理が施され、使い続けたと思われる型板が含まれていた。

今回、吉村家の子孫で、「紅板締め」の復元に取り組んでいる吉村晴子さんを訪ね、貴重なお話をうかがう機会を得た。

吉村さん自身も三十代から染色家として活動しているが、復元にあたっては失敗を重ね、非常に苦勞したという。それと



平成16年から「たかさき紅の会」を発足させ、紅板締めの復元に取り組む吉村晴子さん

いうのも、残っている文献には、「板で締める」「絹を八枚に折って柄杓(ひしやく)にて赤い液をかける」など、染色の肝心な工程が、ごく簡単にしか記されていないからだ。布はどうやって畳んだのか、板の締め方の強さはその程度か、染料の温度、柄杓で染料液をかける回数や早さはどうだったか、少量ずつ丁寧につくりにかけたのか、勢いよく一度に大量をかけたのか…など、山ほどの課題を抱えなが

ら試行錯誤を繰り返して、ひとつひとつ体で覚えていくしかなかった。「それこそ毎回大騒ぎでした。しかも、『それは小僧がやった』と文献には書いてあるから、昔はきつと親方がいて、力仕事は小僧がやっていたのでしょね(吉村さん談)。

濡れたり乾かしたりを頻繁にするとかえって板が傷むので、染色をする半年間は水に浸けっ放しにするのがよい」と教わった。

また、絹選びも困難を極めた。「後染めでありながら赤の無地場をむらなく染めることが最後の難関で、原点である昔の絹を見たら、あまりにも薄い、吸いつくような絹。そこで、当時の生絹にできるだけ近い細い糸で織り、それを精錬(灰汁抜き)して柔らかい絹にしてから板締めにしたら、ようやく均一に染まり、うまくいきました」。

その絹の薄さは、向こうが透けて見えるほど。絹布を幾重にも折り重ねて板に挟み、柄杓で丁寧な染料液をかけていくと、はるか江戸時代の長襦袢を思わせる鮮やかな紅色に染め上がった。

### よみがえる赤

吉村さんに復元した紅板締めを見せてもらった。紅地に白い鶴が羽ばたくそれは、生絹の光沢も相まって、実に美しく鮮やかである。そして、なめらかでいつまでも触っていたいような、しっとりとした心地よい柔らかさだった。

それは、初めてなのになぜか懐かしい、忘れていたものを思い出したような不思議な感覚だった。

(文・宮嶋尚美)



吉村さんが「たかさき紅の会」で復元した紅板締めの一部

## 企画展「江戸の赤」のご案内

# 企画展「江戸の赤」

2009年10月3日(土)～11月29日(日)

この秋、紅ミュージアムでは、「江戸の赤」展を開催します。赤色で彩られた江戸期の貴重な資料の数々を公開します。

数ある色彩の中で、赤は古くから意識的に使われてきた色です。魔除けや呪(まじな)いの色とされた一方、『万葉集』や『古今和歌集』などの歌謡の世界では、慕情や恋情といった強い情感を投影する色として多出します。

また、平安文学を見れば、時におどろおどろしく、物々しい印象を与える強烈な赤色が描かれており、これは翻せば、赤が人の目を惹き付け、心象に作用する色彩であったことを示しています。

戦国時代の軍団編成のひとつ「赤備え」も、赤色による心象性を意識した好例と言えるでしょう。甲冑・馬具・旗指物など自軍の

あらゆる武具を朱塗りに統一した赤備えは、視覚的に敵を恐れさせ、かつ武勇の象徴として機能する重要な装置でした。

このように、赤色は色相の強さがそのまま他者に作用する、主張性の激しい色でした。すなわち、自己主張の色として、これ以上なく適していたのです。

江戸時代、富裕層や粋

筋の人々は、己を飾るアイテムの随所に赤色を取り入れました。しかもそれは、舶来の贅沢な素材と精緻な意匠をもって表現され、当時の美意識の競合と呼ぶに相応しい様相を呈したのです。

本展では、装いの「赤」のほか、祈り・呪いにみる「赤」、粋・伊達な「赤」、描かれた「赤」など、江戸の多彩な赤をご紹介します。



企画展協力：其角堂コレクション

## Information

## かわら版

### 企画展「江戸の赤」のご案内 2009年10月3日(土)～11月29日(日)

【会期】前期：10月3日(土)～11月3日(火)／後期：11月6日(金)～11月29日(日)

【休館日】11月2日をのぞく毎週月曜と展示替え期間(11月4～5日) ※ただし、月曜日が祝日または振り替え休日の場合は翌日休館。

【開館時間】午前11時～午後7時(最終日は午後5時まで) ※いずれも入館は閉館30分前まで。

【企画展観覧料】500円

【企画展協力】其角堂コレクション

※企画展開催中は、常設展示はご覧になれません。

### 新商品のご案内

伊勢半本店では、10月3日(土)～11月30日(月)の間、小町紅『手毬』を期間限定発売いたします。今秋は、七五三をテーマにデザインした桔梗柄の手毬が仲間入り。女のお子様が初めて点す口紅には、本紅をおすすめいたします。



Since 1825

伊勢半本店  ミュージアム

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F

TEL&FAX: 03-5467-3735

東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車  
B1出口より徒歩12分

<http://www.isehan.co.jp>